

## 可能世界の構想

### Image of a Possible World

竹山聖

Kiyoshi Sey TAKEYAMA

#### A. 世界の改変可能性に気づく

##### Awareness of the Possibility to Change the World

生きる——これこそまさに、この自然が存在するとは別のように存在したいという意欲ではないか？

ニーチェ<sup>1</sup>

存在者のあるところには、結構と組み合わせもあるのです。

マルティン・ハイデガー<sup>2</sup>

洞窟の薄暗がりのなかで、ランプに照らされた教会内部程度の光を受けながら、つい一瞬前まで存在しなかったものを創出することによって、彼はそのときまで存在していたものを超越に至ったのである。

ジョルジュ・バタイユ<sup>3</sup>

1. ニーチェ『善悪の彼岸』竹山道雄訳、新潮文庫、1954、p.20。

2. マルティン・ハイデガー『シェリング講義』木田元・迫田健一訳、新書館、1999（1971）、p.113。

3. ジョルジュ・バタイユ『ラスコーの壁画』p.59。

#### 1. 世界は与えられている／形の自覚

##### First Step: Given World/ Notice it

世界は与えられている、とわれわれははじめに受け止める。赤ん坊はまず世界を了解するところからはじめる。知覚によってとらえられる世界を形にすること。意味として受け止めること。このとき世界はすでに善意や悪意によって彩られている。

赤ん坊は声を上げ、動かせる限りの身体の部位を動かして世界の反応を確かめ、不快を取り除こうとする。与えられた世界を捉えることは、実ははじめからある種の働きかけと連動している。また働きかけられたことの意味を了解することとも連動している。

幼い子供はやがて世界が身体の動きと連動していることに気づく。その身体が実は自己というふうに名づけてもいいようなある種のまとまりを持ったものであることを発見する。母をはじめ、周囲の事物と一体化した世界から、自身の裁量の範囲内の世界を切り取る。あるいは未分化な身体を取り巻くおぼろげな状況の中で、不幸にも周囲からずれてしまう自らの運動に関与する部分世界があることを知る。それが身体の痛みや快感に直接的に関与していることを「自覚」することと、どうにもならない外界があることに気づきはじめるのが同時である。

ここで内的な感覚が外部に投射される。私の子供がまだ幼い頃、まぶしいという感覚を表現するのに「目から光が出ている」という言い方をしたことがある。ハワイの強い陽射しが目を射たのだったが、これはまぶしさが目の尋常ならざる状態として感覚されているのがよくわかる表現だ。自他は未分化である。やがて光の刺激が外部に投影され、つまり環境の属性であると認識されて、いわば世界と自分自身が分離されるようになる。

世界は与えられたのである。身体と連動はしつつも、さしあたり自らの無力を痛感されるばかりの、どうにもならない環境として与えられたのである。

身体は動き、感覚は働き、反応や表現の努力を繰り返しながら、働きかけるものと働きかけられるものに世界が分離されて、世界のなかに投げ出された自分を発見する。幼心にも自身が一個の形をもつ存在であることに気づく。

成長しても、多くの場合、周囲の環境は与えられたものでどうにもならないものだと感じられる。順応していくしかない、と感じられる。しかしやがて自らの能力の自覚と、欲望の生成が連動し、

世界に働きかけ、世界の改変が試みられるようになるのである。

世界を改変する可能性を自覚する以前、すなわち建築の設計という働きかけの行為を通して世界に出会う以前は、概して世界は与えられたものとして認識されており、このこと自体はものと制度の惰性のゆえに、処世術としてはあながちまちがった態度ではない。ただ建築の設計という行為は、いやがおうにも、人間を、与えられた世界からはみ出た場所に連れてゆく。倫理のゆえでなく、真理のゆえでもない。まずさしあたりは世界に誘惑される好奇心のゆえに。そして自ら世界を改変するという欲望のゆえに。

## 2. 世界は改変可能である／道具の制作

### Second Step: Changeable World/ Make it

自分に気づくこと。これは人類の発見である。自分が自然から分離される。世界を攪乱する存在として自分がいる。しかも自らのささやかで無力な身体が道具により強化されて、自然は改変の対象となる。人類が二本足歩行という移動形態をとったために、両手があき、移動手段から解放されて道具をよく用いることになり、またそのために脳が発達したと考えられている。もっとも道具を使う動物はほかにもいる。人間が今日の発展を遂げた理由は、道具の可能性をさまざまに試行し、製作法、使用法や共同の作業を通して、世界改変に対する明快な意志をもつようになったこと、またこれを伝えるための手段を構想したことにある。道具は直接的な世界の改変のみならず、間接的な世界の改変、すなわち意志の伝達に用いられるようになった。見えるものに対する想像力のみでなく、見えないものに対する想像力も、そこで鍛えられていった。世界に徴を見出し、記号を見出し、並行して言葉というメッセージ伝達の手段が、声の加工を通して生み出され、体系化されていったのであろう。人類は、周囲にあるもの、あるいは自らが発することのできる表現手段すべてに、意味を見出そうとした。すなわち形を見出そうとした。形が世界改変の鍵となった。

道具をもって自然に働きかけ、あるいは言葉をもって世界に働きかける。絵や音などの表現によって、世界に働きかける。目に見えぬ存在の加工には、意志の介在が求められる。意志の介在がときに世界の改変をうながすように見えたこともあったろう。魔術的行為の自覚である。ただ魔術的行為を自覚したからといって、これをむやみに使ってでたらめなつくり変えをするのでは、魔術の意味がない。しかるべき目的にそって意志が、そして意志をあらわす形が見出されなくてはならない。そこで絵が、徴が、言葉が、想像世界から現実世界へと適切な写像を結ぶべく、鍛えられ、磨き上げられていった。

形を見出し、形を生み出し、形をつくり出す。人類は、そこに自然を超えた、ある仮想の世界をつくり出すことができることを発見したはずである。

形の発見の底には、形と自然の結びつきの原理とともに、形を積極的に操作する人間の意志の介在があったはずである。ただし形はもともとは空間的、絵画的、音楽的知能を刺激するものであるから、むしろ外界から刺激される欲望により直接的に結びついたものであった。これが言葉になれば、言葉は現象から論理を取り出す役割を果たすから、外界は抽象化されて、脳においては空間、絵画、音楽とは別の部位の発達をうながしたことだろう。

形や言葉を通して、脳は現実以外に、可能性というものを考えることができるようになった。人類はこのことを知る脳をえた。あるいは、現実の底には潜在的な何者かが存在している、何者かの意志が介在している、人間もまた何者かに成り代わって意志を介在させることができるのではないか、とこう考えるようにもなった。フィクションの芽生えである。

世界はもはや与えられているばかりでなく、世界はつくり変えることができる。呼び出すことができる。生み出すことができる。人類にとってこれはさらに大きな発見であり、驚きであったはずだ。

### 3. 世界は可能世界である／芸術の発生

#### Third Step: Possible World/ Create it

植物は生成する世界に存在している。動物は生産する世界に存在している。そして人間は、制作する世界に存在している<sup>4</sup>。成るものと生むものとそしてつくるもの。自然の大きな輪の中に介入する、その可能性の喜びと同時に怖れを感じつつ、人間は自然の加工を開始した。つくるといふ行為を開始した。人間はやがてつくられた世界によって自身の感覚を再編成することができることに気づくのである。

アルタミラの洞窟をかつて訪れた時、日の光の差す入り口近くの日常生活の場から、細い通路によってかろうじて結ばれた洞窟の奥の、日のまった日常と非日常の対比が鮮やかであった。仮想の世界、フィクショナルな空間がそこに出現していた。人類のフィクション構築の原型を見た思いがした。

動物の躍動する姿勢は、おそらくは生命の徴であろう。そこでいかなる儀式が執り行われていたのだろうか。暗がりの中に松明をともしつつ、生命の豊穡の祈りと行為が執り行われていたのだろうか。

これについてはアンドレ・ルロワ＝グーランによる面白い分析がなされている。洞窟に描かれた動物の群れ、その種類と配置を分析しながら、ルロワ＝グーランは、それが言語体系にも似た、象徴体系をあらわしているのではないかと考えた<sup>5</sup>。しかもそれは、雄と雌の象徴が、広くなったり狭くなったり窪んだり奥まったりする場所の特性を強調し、しかもその勢力を互いに拮抗させるように配列されている。最も頻繁に登場するウシとウマを中心にして動物たちの跳梁する構図は、性的メタフォアに色濃く彩られた、旧石器時代の人類の、世界観であり、思想である。このように読み取ることができるというのである。

物質の衣に観念の世界を込めるのがあらゆる芸術の表現手法であり、建築をその最大の事例に数えるならば、身体を超えたスケールの空間を、ある世界観、思想で埋め尽くしたという点において、アルタミラに代表される旧石器時代の洞窟群は、芸術の発生とともに、建築のはじまりを画しているといっていだろう。

人類は世界を改変する術を、そこでつかんだのだ。空間と身体の間での感応の体験を通して、イメージーションの飛翔が身体感覚の再編成をもたらす、他者の身体と意識を一つに縫い合わせ、個々別々の身体に一体感を付与し、この一体感が現実と連動する可能性とも結びつく、ということ<sup>6</sup>。成り、生まれ、つくられた形は、不可視の世界をこちら側に呼び出すための媒介者であり誘惑者であった。すなわち移行するエロスの通路であった。

あるいは不可視の世界を紡ぎだす想像力発動の契機であった。そこでは、成らず、生まれず、つくられなかった存在、あるいは滅し去られ、殺戮され、破壊された存在、この生と死の関係が、媒介者／誘惑者すなわちエロスを通して、思考されていたのではなかったか。

形の組み合わせの妙、そこに潜む性的なメタフォアは人類の世界生成の秘密を探る気持ちを大いに刺激してきた。古代の祝祭においても、さまざまな宗教的儀式においても、生命にとって極限的な、非日常的な体験としての性と死は、ダイナミックな結合を見せていたことが知られている。人類の歴史を通して、性は死の象徴であり、死と再生の凝縮された行為であった。

アルタミラで執り行われていたのも、こうした非日常的な体験であり、生と死を媒介し、不可視のなにものかへ誘惑する者と交歓する儀式であったのではないか。自然と世界は性的に交流していたのではないか。成るものと生むものとつくることとの交感、空間と身体の間での感応を通してかつてそこに展開されていたのではなかったか。洞窟の冷やかな暗がりのなかに、旧石器時代の人類の思考が息衝いていた。成り、生まれ、つくられるものと、成らず、生まれず、つくられなかったものをめぐり思考が息衝いていた。

成らず、生まれず、つくられなかったものに対する想像力がそこにあった。

あるいはこれをいまだ成らず、生まれず、つくられなかったもの、つまり「・・・以前」という思考の萌芽と見るならば、これが死の観念の敷衍、拡張であることが容易にわかるだろう。つまり死は、単なる生の停止でなく、生の胎動を孕んでいる、という考えである。

4. 三木成夫は解剖学的見地から、人間のからだを植物性器官への動物性器官の介入ととらえ、動物性器官の分化の果てに脳が異常に発達し、心と頭の対立をもたらしたという示唆深い指摘を行っている。：たとえば『ヒトのからだ』うぶすな書院、1997。ここでつくるものが成る、生むを凌駕すべきと主張しているのではない。人間はそれらの重ねあわされた位相を生きている。

5. アンドレ・ルロワ＝グーラン『身ぶりと言葉』荒木亮訳、新潮社、1973(1964・1965)。人類の生物学的、技術論的、芸術学的な見地から、示唆に富んだ論考が展開されている。とりわけpp. 371 - 379の洞窟絵画に対する性的かつ象徴体系的仮説が興味深い。

6. そこに「聖地」という言葉を充てていいのだろうか。植島啓司による「聖地」の定義は以下の如し。  
01 一センチたりとも移動しない。  
02 シンプルな石組みをメルクマールとする。  
03 「この世に存在しない場所」である。  
04 光の記憶をたどる場所である。  
05 「もうひとつのネットワーク」を形成する。  
06 世界軸が貫通し、メモリーバンクとして機能する。  
07 母胎帰帰願望と結びつく。  
08 夢見の場所である。  
09 感覚の再編成が行われる。  
『聖地の想像力』集英社、2000、pp.5 - 6より。

死が「生以前」であり、生の胎動を孕むとするなら、それは性と結びつかざるをえない。むしろ性は死を生に転化する扉である、と認識されていたであろう。死はかくして墓あるいはモノユメントに封印され、聖別された。

その扉をうまく開けることが生の充溢を導く。生命は消耗する。消耗するがまた復活もする。その復活の扉が性だ、と。

生命の消耗には性の充溢をもって対処せねばならない。その器が住まいであり、神殿であった。これがとりもなおさず建築の出発である。それは「死」に触れる遊びであり、聖なるものに出会う空間の創造であった<sup>7</sup>。

人類はものの向こうに不可視の世界をつねに透視しようとしてきた。芸術は想像力発動の契機として純化された道具であり、可能世界に遊ぶ道を開くものであった。自己を越え出ること。他者との交感を果たすこと。空間との一体化を祈ること。洞窟の奥ではこうした想念が渦巻いていたのだろう。

バタイユはラスコーの壁画について「つねに自己を超え、死と生誕との戯れのなかで、はじめて完全なものとなる『生』を、一面に溢れきらめかせている」<sup>8</sup>と描写した。「芸術活動という形態のもとに労働が遊びによって超克されたとき」<sup>9</sup>の祝祭における恍惚と忘我と絶頂を想像しました。そしてそれが死の供犠の可能性であることを示唆している。バタイユの思考の道を辿るなら、アルタミラで執り行われた行為が生命現象の自然への投影であり、そうした形での「世界の改変」の試みであり、具体的には「性の儀式」でもありえたであろうことは容易に想像がつく。

「遊び」の底には性的なるものが潜んでいる。「遊び」とは聖なるもの、すなわち他界との交換である。芸術は、そして空間表現としての建築は、そのはじまりのときから「遊び／生と死の交換」を内蔵していた。

## B. シミュレーションをおこなう／「世界」へ Simulation of Another World

### 1. シンボルの思考／＜距離＞の発見 Thinking through Symbols/ Discovery of <Distance>

後期旧石器時代、とりわけ農業が始まって以来、表象＜シンボル＞(宗教的、美的あるいは社会的)の世界が階層的に技術の世界よりもつねに優位に立っており、社会のピラミッドは、すべての社会の原動力である技術よりも表象機能に優位を与えるというあいまいなやりかたで築きあげられてきた。

アンドレ・ルロワ＝グーラン<sup>10</sup>

象徴＝シンボルとなり、命名されるのは、危険なもの、あるいは役に立つものである。人類の生存に象徴体系は与って力があつた。象徴体系を操作することを通してはじめて、対象あるいは目的が、より正確に、そして幅広く、射程に収められるようになった。感覚に頼るしかなかった対象や目的の設定が、つねに明晰な意識の射程にとらえられるようになった。対象や目的を載せるテーブルを、人類は築いたのであつた。象徴体系の組み上げとともに、対象、目的が、時間、空間、世代を越えて伝えられるようにもなったろう。象徴体系のなかで最も複雑な思考を可能にした道具が言語であつた。

言語という究極の世界改変の道具を手にした人類は、それが世界構築の道具であることにも気づく。世界は現実即して、時に現実を外れて、繰り返す描かれたらう。やがて思考そのものが言語に支配されてしまうようになる。言葉を通してしか、世界を認識しえなくなってしまうのである。

さらに正確に言えば、世界は言葉によって構成されるようになる。ハイデガーにならっていえば、

7. 三木成夫によれば、動物の欲望は「食の相」と「性の相」に分けられる。「胃袋とベニスに、目玉と手足の生えたのが動物。その上に脳味噌の被さったのが人間」という古人の評言を引いている。『海・呼吸・古代形象』うぶすな書院、1992、p.142。

とするなら、アルタミラは入り口付近の日常的な「食」の空間と、洞窟奥の神殿にあたる非日常的な「性」の空間によってできている、と考えることもできよう。いわば居住空間の原型を示している。のちの「建築」の発達は、これに「脳」を被せようとする試み、であつたのかもしれない。すなわち「食」と「性」に＜支配の知＞と＜分配の制度＞を被せ、統合する試みである。

8. ジョルジュ・バタイユ、前掲書、p.93。

9. ジョルジュ・バタイユ、前掲書、p.89。

10. アンドレ・ルロワ＝グーラン、前掲書、p.186。

言葉によって構成されたもの、それが世界の定義である。

シンボルは世界に対する〈距離〉を生み出し、これを調整し、加工する。

いわば世界を多層化し、これを幾重にも重ねることを可能にする。

ジャック・デリダに即して、ハイデガーの三つのテーゼをみてみよう<sup>11</sup>。

- 1) 石は世界なしで存在する。
- 2) 動物は世界という点で貧しい。
- 3) 人間は世界形成的である。

ハイデガーのいう世界は精神世界であるから、1)は石が精神を持たず、2)は動物にとって世界が単に与えられただけであることをいっている。世界は〈距離〉を持たない。すなわち多層化されていない。これに対して、3)は人間がフィクションを楽しむ動物であることを示唆している。さらにいうなら、人間は、世界が単に与えられたものでなく加工可能なものであると自覚している、そうした存在者であることを意味している。命名され、象徴体系化された世界は、〈距離〉を持ち、多層化されている。人間はそのような〈距離〉をもつ世界に生きている。建築は世界の構想であるが、より厳密に言えば、可能世界の構想である。いまだ実現しないものを構想するのであるからだ。現実の素材を前提にしながらも、経験から抽出された理念、目的などに基き、未来に向けて投げかけられる可能世界を構想するという行為である。この可能世界を打ち立てるにあたってシンボリック思考の果たした役割はたいへん大きいと考えられてきたし、事実そのとおりであった。

たとえばカントが理念の体系とみなした「建築術」は明確にシンボルの体系であって、だからこそ哲学のメタフォアでもありつづけた。カントは『純粹理性批判』のほとんど締めくくりの一章をかけてこの「建築術」という概念を敷衍している。カントは以下の言葉を発している<sup>12</sup>。

人間の理性は、その自然的本性から言って建築術的〔体系構成的〕である。

建築が理性的なのではない、理性が建築的だといっている。つまり建築術とは、西欧思想の根幹を成す「理性」のありようを示す概念なのであって、すなわち「体系を構成する技術」<sup>13</sup>にほかならない。

ハイデガーは『シェリング講義』においても、カントの「建築術」に触れつつ、この「建築術」という言葉自体がすでにカント以前の哲学でも「存在についての教説の叙述」を表す名称であったと指摘している<sup>14</sup>。

ハイデガーは「純粹理性の建築術」という言葉に潜む理性、体系、建築の深いつながりを次のように述べている<sup>15</sup>。

「建築術的(アルヒテクトーニッシュ)」という言葉のうちには、構築された、接合されたということの意味する構造的(テクトーニッシュ)という言葉と、指導的で支配的な根拠と原理に従ってということの意味する  $\alpha\rho\chi\eta$  (アルケー) という言葉がふくまれています。

建築術とは、「我々の認識のうちにあつて学問的であるもの一般についての教説」、つまり、われわれの認識において学的な契機をなしているものについての教説だということになります。

カントは、精神の法則をなすものとして理性の内的な体系性格をはじめて発見しました、——発見したということは、哲学にあつてはつねに、それをはじめて形成したということでもあります。

カントは理性(認識のすべての上位能力)を「発見」した。しかもそれが構築的であり体系をもっていることから、建築術にこそその雛型を見ることができると考えた。

11. 1929-30年のフライブルク大学における冬学期で、「世界とは何か?」という問いに応じてハイデガーが提出した三つのテーゼである。: ジャック・デリダ『精神について』 港道隆訳、人文書院、1990(1987)、p.76。

12. イマヌエル・カント『純粹理性批判(中)』 篠田英雄訳、岩波文庫、p.154。

13. カント『純粹理性批判(下)』 p.122。

14. ハイデガー『シェリング講義』 木田元・迫田健一訳、新書館、1999(1971)、p.88。

15. ハイデガー、前掲書、pp. 88-89。

もとより西欧思想自体が、体系を築こうとする営みであって、「建築」はそこに参照を提供しつづけてきた「体系」のメタファーでもあった。したがって議論はトートロジーの様相を呈さないでもない。ただ建築術という、誰もが目に見える形で現実と理念の橋渡しをする体系的技術に、カントは人間理性の似姿を見ようとしたのだった。

建築術とは構想を実現する技術の総体をさしている。建築の構想は多層化された世界を横断しつつ、新しい世界を提出する。このとき、シンボリック思考は技術となる。

「動物は、物を道具にすることはできるが、tekhne [技術] に達することはできまい」<sup>16</sup> とデリダがいうのもこのことである。動物は「命名」する能力を欠いている。可能世界への問いを問うことができない。

可能世界、すなわち、それがそうであるかも知れず、そうでないかも知れず、ないものかも知れない。この<同一・虚構・不在>の三つの可能世界のセットを、動物は想像しえない。命名して現実と<距離>をとり、操作することができないからである。そこで「tekhne [技術] に達することはできまい」とデリダは言明して、「問い・動物・技術」という三本の導きの糸を提示するのである。このとき「技術」とは<距離>である。

デリダによれば、動物は「問い」はしない。「問い」が、獲物を取ったり生殖を行ったりする場合の単なる障害、いわば迂回でしかないから、動物は「問い」をもたない。「問い」とは「可能性の思考」のことであるから、動物は「可能性としての死」を問えないし、知りようがない。人間のみが、その「可能性の思考の道具」であるシンボルを通して、すなわち言葉を通して、死を問うことができる。可能性の思考は「ない」ことを「問う」ことができる。だから死を知ることができる。「可能性としての死」を問うことができる。

かりに、可能性としての死（動物は知りえない）が、人間に言葉を話させたとするなら<sup>17</sup>、同じく可能性としての死が、建築へと人間を導いたといっているのだろうか。建築という可能世界構想の技術の体系へと。

可能世界を問う思考は祈りの表現に向かう。死は畏怖すべき対象として可能世界に君臨する。死が生を断ち、また生をはじめる力となり、ものを破壊し、ものを生み出す契機ともなる。そのような可能性の場として、死が、人類の前に立ち現れたのではなかったか。そのとき、言語も建築も、死に向けて捧げられる祈りの形象化となる。死が建築を産み落とした。魅力的な言辞だ<sup>18</sup>。言語と建築はことによるとその出自を同じくするのかもしれない。可能世界への祈りと象徴としての、言語と建築。

「建築と言語、それは人間がこの世界に持ち込んだ数々の虚構のうちでも、もっとも始源に近い虚構といえるだろう」と木村敏は述べている<sup>19</sup>。虚構／フィクション、それは世界に<距離>を生み、可能性としての「死」に至るプロセスを荘厳する。

## 2. 世界モデルの構想

### World Model

シンボルは世界モデルを可能にした。人類の世界は現在だけでなく、過去と未来に大きく想像力の触手を伸ばした。過去の経験を反芻し、共有し、解釈し、現在を把握し、理解して、未来を予測するという、可能世界の構想が可能となった。

動物の絵というシンボルを通して、先史時代の人類たちは世界の成り立ちや成り行きのシミュレーションを行っていた。つまり世界モデルを築いていた。この世界モデルを身体全体で感じ取りつつ、人々は洞窟にさらなるモデルを重ねていった。洞窟の空間は世界をより豊かに改変せんとする祈りに満ちていたはずである。世界モデルとは、すなわち現実から抽出された意味ある形を通して抽象し圧縮された、世界の構想である。人類が表現という行為を通して世界は改変しようと考えた証拠が、そこに残されている。

アルタミラは約2万5千年前から1万2千年前頃までに延々と描かれつづけた世界モデルだが、やがて人類は約5千年前に都市という世界モデルを構築しはじめた<sup>20</sup>。都市は人間の分業・階層化と物流・交換のシステム、これを支える神殿イデオロギーがあいまって、高度に組織化さ

16. デリダ、前掲書、p.90。

17. デリダはハイデガーを引きつつ、繰り返す、死が人間に言葉をもたらした可能性を暗示している。たとえば、デリダ、前掲書、pp.195-6の註において、言説における死の意味系を問うことの必要を説く文脈の中で、ハイデガーの『言葉への道』に言及しつつ「そして多分、ハイデガーならそう言うであろう。彼は後年、動物は『死としての死』を経験することができないと強調することになる。だからこそ動物は話すことができないのだ、と」と注釈する。

また、デリダ、『アポリア』、港道隆訳、人文書院、2000、pp.75-76においても、同じくハイデガーの『言葉への道』から以下の言説を引いている。「死すべき者は死を死として経験しうる者のことである。動物にはそれができない。また動物は語ることもできない。死と言葉の間にある本質的な関係が突如として稲妻のごとく閃くことはあっても、その関係はしかし、いまだ思惟されていない。ただし、ハイデガーが「死それ自体と言葉との絆」について「死それ自体の経験が言葉に依存するとは言っていない」(同書、pp.76-77と、その留保を指摘することも忘れていない。

18. この検証はIV.-A-3においてあらためて行う。

19. 木村敏「居場所について」『Anywhere』NTT出版、1994、p.45。木村は「アル」と「イル」を対比させつつ、各々が偶然と必然に対応することから、「イル」という生存のかたち、すなわち必然が「生命が偶然の世界に打ち込んだ亀裂」であり、「あらゆる虚構の根源」であり、この区別を存続させるために言語＝存在の家、自らの居場所を築いたのだとする。

20. 都市発生については、竹山聖「都市発生論」『traverse - 新建築学研究 - Vol. 2』traverse編集委員会、2001、pp.35-46を参照されたい。

21. ゲーテンベルクの活版印刷がもたらしたさまざまな影響については、マーシャル・マクルーハンによるたいへん面白い分析がある。『ゲーテンベルクの銀河系』森常治訳、みすず書房、1986(1962)を参照のこと。

22. 近年のES細胞や移植技術の進歩、生命操作の現場からの報告を聞くにつけても、身体が物として圧縮・保存・輸送の対象となっていく先の未来の弱肉強食世界が予感され、身体もまた人類の新たな「領土」であったのだということに、いままさながら気づかされる。「食」の対象としてでなく、「性」の対象としてでなく、「交換」の対象として、「交換」されつくして残るものもまた、果たして「器官なき身体」と、アイロニーを込めつつ、呼んでいいのだろうか。

23. 三木成夫が『ヒトのからだ—生物史的考察』うぶすな書院、1997他で繰り返して説いている概念であって、ここから多くの示唆に富む発想が導かれる。吉本隆明は三木の思考方法をマルクスと折口信夫に比しながら、内臓系（植物性）の心の動きを自身の定義する「自己表出」の言葉、体壁系（動物性）の感覚器官の働きを「指示表出」の言葉と照応させている。：『モルフォロジー』第16号、ナカニシヤ出版1994所収の講演や、『海・呼吸・古代形象』、『ヒトのからだ』に寄せた解説など。

れた世界モデルであった。共に住まう人々に上に君臨する支配と分配のシンボルであり、遠望する他者に対する富のプレゼンテーションの手段であった。

書物というモデルは知の圧縮形態として生み出された。長く写本が繰り返されたが、15世紀のゲーテンベルクの活版印刷がヨーロッパ世界における情報革命をもたらした<sup>21</sup>。ローマを頂点として組織され、末端までネットワークを張り巡らせた教会、とりわけ都市をコントロールした司教座、カテドラルというモデルに対する、それは挑戦的なモデルとなった。個人と神を直接に結びつけ、やがて宗教改革の火蓋を切らせた。

世界モデルの構築は、<世界を収容する欲望>に支えられている。世界を圧縮し、保存し、輸送可能な形態とする欲望に導かれている。近代以降も幾多の世界モデルの試みが繰り返された。現代を眺め渡せば、映像に世界をこめた映画というモデル、TVというモデル、ビデオというモデル、ついにはコンピュータというモデルをも発明して、人類はあくことなく世界モデルの開発にいそしんできたことがわかる。世界は圧縮され保存され輸送される。人類はこの圧縮世界を欲望する。

世界モデルではないが、文字や貨幣も圧縮・保存・輸送のシステムである。目に見えないものを思い描き、これを圧縮によって目に見えるものに封印し、さらに技術を革新しつつより高度な圧縮の試みを続けているのが人類である。

身体機能の圧縮・保存・輸送も試みられている。見ること、聴くこと、話すこと、等々。しかしながら、生身の身体はついに圧縮されることはないであろうから（そう望みたいものだ）<sup>22</sup>、身体を覆うメディアとしての建築は必要とされつづけることだろう。建築的構想について補足するならば、もとより可能世界に魅せられた人間がただ必要な空間を覆うだけで満足するはずはないから、新たなフィクションを表現する試みは、今日においてもおそらくは将来にわたっても、とどまることなく続いていくことだろう。

技術の総体もまた、さまざまな分野の成果を取り込みつつ展開しているから、人間の感覚はそれらの発明とともに再編成され、変容していく。世界はつくり変えられ続けてきたし、今後もつくり変えられ続けていくはずである。

### 3. 可能世界に込められる意志

#### Conception of a Possible World

建築とは世界の改変可能性を巡る思考と実践の行為である。そうした行為によってできあがった物体を建築物という。見ることが与えられたものを了解し、洞察することだとして、つくることが可能世界の構想を図る技術の体系をもってこれを改変することだとするならば、人類は見ることからつくることへとその存在形態を変えた。自然から技術に支えられた自由へ、技術という距離／方法をもって自然に対峙する存在へと、その存在形態を変えた。建築はそこに産声を上げる。それは自然に手を加えることを通して世界を創造する行為であり、技術の体系であった。

世界に形を発見し、美を見出し、媒介者＝誘惑者たるエロスに導かれ、魅了されていた人間が、世界を改変する可能性に気づく。個体発生は系統発生を辿りなおす。赤ん坊が大人になって世界が変容し、自らの力を自覚し自身の世界を築くように、人類は、世界が与えられた存在から世界を改変する存在へと、その存在形態を変えた。われわれは投げ出されてあると同時に投げ返しつつあるものとして生きている。世界はついに、打ち建てられるものとなる。成る・生む・つくるがそこで横断的に思考されていたはずだ。

解剖学的には、人間は栄養＝生殖の植物性器官と感覚＝運動の動物性器官の多層体としてある<sup>23</sup>。また動物性器官のうちでも特につくる行為を統御する脳が肥大して今日にいたっている。しかし脳によって統御されぬ器官をも、身体は内蔵しているのであって、その全体でわれわれは世界を感覚し、摂取し、消化し、感応し、欲望し、意志し、生きている。

道具がたとえば手に代表される、身体の部分によって操作されるものであるとするならば、空間は身体全体を包み込んで感覚を操作する。道具と空間は規模という点だけでなく、身体との関

係自体が異なっている。この空間をつくり上げることが建築という行為である。

したがってそれは身体全体と関わる世界の可能性を開くことであり、すなわちひとつの世界を築くことに等しい。この世界は可能世界であるから、それはシンボルへの圧縮を方法の基礎とし、世界を収容する欲望に支えられながら、世界と共振しつつ、メタフォリカルな言い方をすれば、身体を世界へと拡張する行為でもある。

建築空間の体験は身体全体が包み込まれるという点で、いわゆるシンボルや対象を操作するという感覚よりも、全感覚を再編成されるという神秘的体験に近い。それゆえ、こうした空間の構想は、不可視の力をものから引き出すという思考形式を育てたと考えられる。成り、生み、つくられるものと、身体を通して成り、生み、つくる行為とのメタフォアは、そこにおいてきわめて親密な関係で結ばれることになる。つまり行為のイメージともものが連動している。したがって建築は身体の運動を空間に投影する行為だということになる。観念を投影するというより運動を投影する。くだいて言うなら頭の判断ではなく身体感覚を、である。

空間が変容し、身体が変容する。この世界を改変しようのだと気づいたときの驚き、ここに原初の建築的欲望は根ざしていたことだろう。身体を包みこむほどの空間を、すなわち建築という構想を、建築物という物体に体現するという欲望。空間体験における身体感覚の変容だけでなく、ものをつくることの喜び自体が、生命力をも更新してくれたはずだ。建築は、その原初の形態においては、政治や社会制度によってたわめられることのない、人類の根源的欲望の表現であったはずである。

このとき建築が向かうのは、可能性の世界である。必要の世界ではない。いわば自由の世界である。原初の建築は可能世界の構想である。ひとえに想像力の強度に支えられている。その結果、打ち建てられた建築物の生み出す空間が、さらなる強度を持つ想像力を磨き上げた。しかもその想像力の迸りは、身体感覚とも連動していた。およそ想像力とは、身体に寄り添って発動するものだからである<sup>24</sup>。そしてこのとき心と身体を結んでいるのは想像力の働き、すなわちイメージである<sup>25</sup>。イメージが形をとる。形が生命の力に呼応する。こうしたプロセスを経て、より豊饒な生命世界へと向かう祈りがふくらみ、意志が研ぎ澄まされて、空間の構想は世界モデルへと結晶していったことだろう。

身体は世界モデルを受肉する。やがて時代が下り、生活形態が変化するたびに、新たな世界モデルに対応する身体が形成されてきた。人類は洞窟(生む身体)を出て、農耕(育てる身体)を開始し、集落(集まる身体)を営み、都市(交換する身体)を築き、争い、協力し、ともに信じ、あるいは裏切りを余儀なくされる。水運が栄え、キャラバンが組まれ、鉄道が敷かれ、ハイウェイが伸びて、航空機が空を飛び交う(移動する身体)。狼煙が焚かれ、角笛が吹かれ、伝令が走り、早馬が駆け、電信が打たれ、電話が通じ、インターネットが張り巡らされる(コミュニケーション/通信する身体)。教会でメッセージが流され、ラジオが語りかけ、TVが置かれ、地上波は衛星を経由するようになる(コミュニケーション/表現する身体)<sup>26</sup>。

世界は語りかける。その言葉に耳を澄ませ、その形に魅了される身体的存在である人間は、つねに世界の可能性に感応し、世界モデルに向けて空間を打ち建てる存在でありつづけるだろう。世界モデルをつくる。そこに込められるのは時代の身体に育まれる意志であり、とりもなおさずその時代を呼吸し凝縮する個人の意志である。

24. マーク・ジョンソンは『心のなかの身体』菅野盾樹・中村雅之訳、紀伊國屋書店、1991(1987)において、想像力が身体感覚に根ざすものであることを詳細に論じている。

25. 河合隼雄が箱庭療法に触れて、次のように語っている。「言語でも詩や文学のように深い表現が可能であるが、一般には言語化できることは、本人の意識の範囲内のことである。言うなれば『こころ』の表層の世界である。ところが、イメージとなると、その上その表現のために身体も用いているとなると、まさに『こころ』と『からだ』をつなぐものになってくる。」：毎日新聞 2000.2.7 夕刊。イメージが心と身体をつなぐ。建築は身体化されたイメージである。イメージが身体の運動感覚を通して空間化される。空間は身体にかかわるからである。

26. ミラノ・トリエンナーレ 1996 における日本チームは、コミュニケーションする身体、社会化された身体を総称して「パブリック・ボディー」と命名し、展示とディスカッションを行った。この記録が、隈研吾との共著で出版されている。竹山聖・隈研吾『パブリック・ボディー・イン・クライシス』TOTO 出版、1996。